

千葉市宇津志野窯跡の分布調査

渡邊 高弘

1. はじめに

筆者は昨年、平成3年度の重要遺跡確認調査(窯業遺跡)において千葉市若葉区更科町に所在する宇津志野窯跡の確認調査を担当した。その成果は報告書としてすでに刊行されているが(註1)、筆者の力不足により、調査や報告書作成で行き届かなかった点が多々ある。とくに窯跡や土坑が調査範囲南際で検出されたため、さらに南側にトレンチを入れることができず、遺跡の広がりを明らかにすることができなかった点が多い。

そこで、これを補うために確認調査中に周辺部で小規模な範囲の踏査を行ったところ、須恵器片を採集できる地点を数か所発見した。しかしながら、位置、範囲、性格などを明確にすることができなかったことから、それを報告書中に反映することができず、心残りとなっていた。その後、現地へ赴く機会があり、あらためて分布調査を行ったところ、面的に須恵器片の分布する地点を2か所確認するにいった。そこで今回は本誌上をお借りして若干の成果を報告し、確認調査の補遺を行いたい。

2. 遺跡の位置と確認調査の概要(第1図)

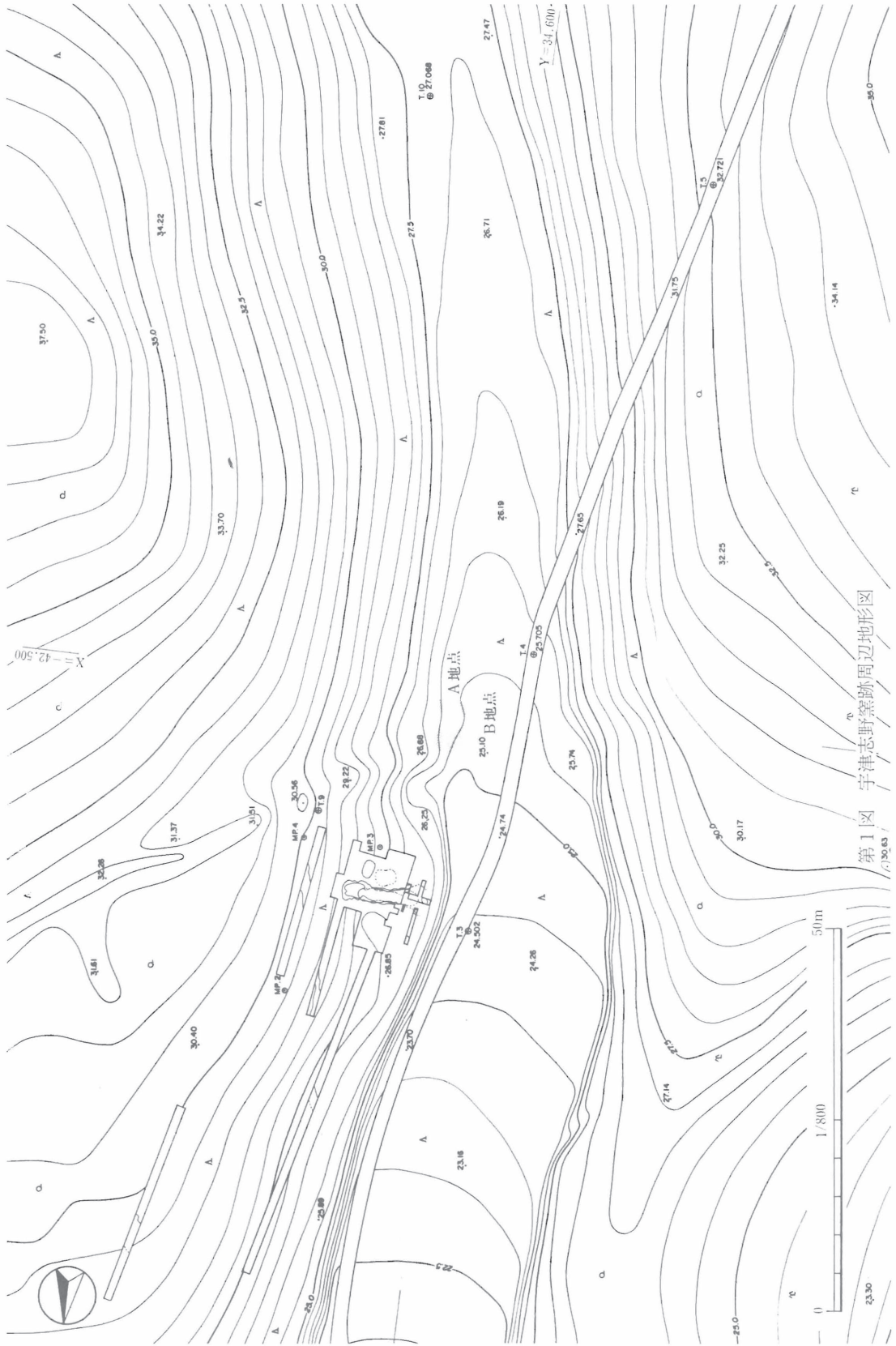
宇津志野窯跡は千葉市の北東部に位置し、鹿島川の支流の右岸の北側から南側に入り込んだ小支流によって開析された谷津の斜面に立地する。東側斜面下の開削面に灰層が露出している箇所があり、その上部の斜面、標高26~29mに重複する2基の窯跡と周囲に窯跡に関わる3基の土坑を確認した。出土した須恵器は甕が最も多く、総破片数の約88%を占め、ほかに坏・皿・高台付皿・甗・鉢・鉄鉢形鉢・短頸壺・羽釜・円面硯・脚部片が出土したが、褐色を呈する軟質なものが多い。窯跡の時期は坏の法量・調整技法から9世紀中頃に比定される。この地点より北側のトレンチからは時期不明の溝2条を検出したのみで、窯跡は確認されなかった。

3. 遺物分布地点(第1図、写真1)

分布調査は斜面が平坦面に変化する箇所を中心に東西斜面両側について行った。杉の植林がなされており、雑草、落葉などで直接地表面の観察ができないためボーリング棒を用いて探査を行った。確認した2か所の遺物分布地点(以下、南側からA地点、B地点と仮称する。)は確認調査拡張区から約20~30m南西側の標高約26.20~25.30mの斜面部から緩斜面部に隣接して所在する。確認拡張区の南側には谷が形成されており、その南側には東西方向に走る土手状の盛り上がり認められる。B地点はその裾に位置し、A地点はその南側に隣接する。なお、公共座標ではX=-42.500、Y=34.600付近、地番では千葉市若葉区更科町2556-14に所在する。

①A地点

図示した箇所はボーリング探査で遺物および灰層の分布を確認した範囲であり、東西方向に細長い形状を呈し、長さ約5.5m、最大幅約2.1mを測る。長軸の方向角は約N-75°-Wである。最上部から下方に向かって約3mは傾斜角約25°の斜面であるが、それより下方の西側はテラス状の緩斜面となっており、約5°を測る。斜面部では深さ約5~10cmで遺物を多量に包含する層に達し、どこにボーリング棒を入れても遺物にあたり、まるで敷き詰められているような状況であった。このことから遺存状態は良好であると推測される。覆土は上層が炭化物を含む暗褐色土、底面付近には炭化物を多量に含む暗灰色土が堆積しており、表土下約15~30cmで、砂質の茶褐色土の地山と思われる層に達した。それより斜面下方の部分では暗茶褐色の表土下約25~40cmで須恵器片、焼土粒、焼土塊、炭化物を多量に含む暗灰色の灰層が約20~30cm堆積しており、その下に暗黄褐色の地山を確認した。雑草、落葉などを除去して表面の精査を行うと、斜面部を中心に比較的大形の須恵器の破片、瓦片および焼土、炭化物の散布がみられ、114点の須恵



第1図 宇津志野窯跡周辺地形図

器片と瓦片1点を採集した。

②B地点

A地点の北側に約1mに位置する。斜面上部の東側から約2.5m西側は最大幅3.5m、高さ最大1.35mを測る小マウンドが形成されている。精査を行った結果、表土はほとんどなく、すぐに黒灰色の灰層が露呈し、焼土粒、炭化物、須恵器片の散布がみられ、小破片が多いが、73点の須恵器片を採集した。灰層の深さは、最も高い部分で約70cm、平均すると約30cmを測り、この土盛状のマウンドは、ほとんど灰層によって形成されているものと考えられる。なお、先述したようにこれよりさらに斜面上方約2mには高さ約80cmを測る土手状の盛り上がり認められるが、この小マウンドとは連続せず、またボーリング探査の結果、ここからは何も確認されなかった。小マウンドより斜面下方の西側では、ボーリング探査によって長さ約3.5m、幅最大4mにわたって遺物の分布を確認したが、遺物の分布は散漫な状況であり、西側に行くにしたがって深くなる傾向を示し、最西端では深さ約1mに須恵器片を含む層を確認した。覆土は暗褐色土を主体とする。

以上の2か所の須恵器分布地点の状況を見ると、A地点は斜面部に須恵器が濃密に分布し、下方の緩斜面には灰原と思われる層を確認した。焼土化した床面の硬化部分を確認することはできなかったが、その形状や規模からも窯跡である可能性が

高い。一方、B地点はそれ自体が窯跡である可能性は低く、また、これより斜面上方に窯跡を確認することができなかった。このことから、B地点の灰層からなる小マウンドは窯跡の改修や補修に伴う掻き出しなどで、人為的に集積されたものであると思われる。その窯跡はいうまでもなく、隣接するA地点である可能性が高く、約20mも北側に位置する1A・1B号窯跡ではないと思われる。

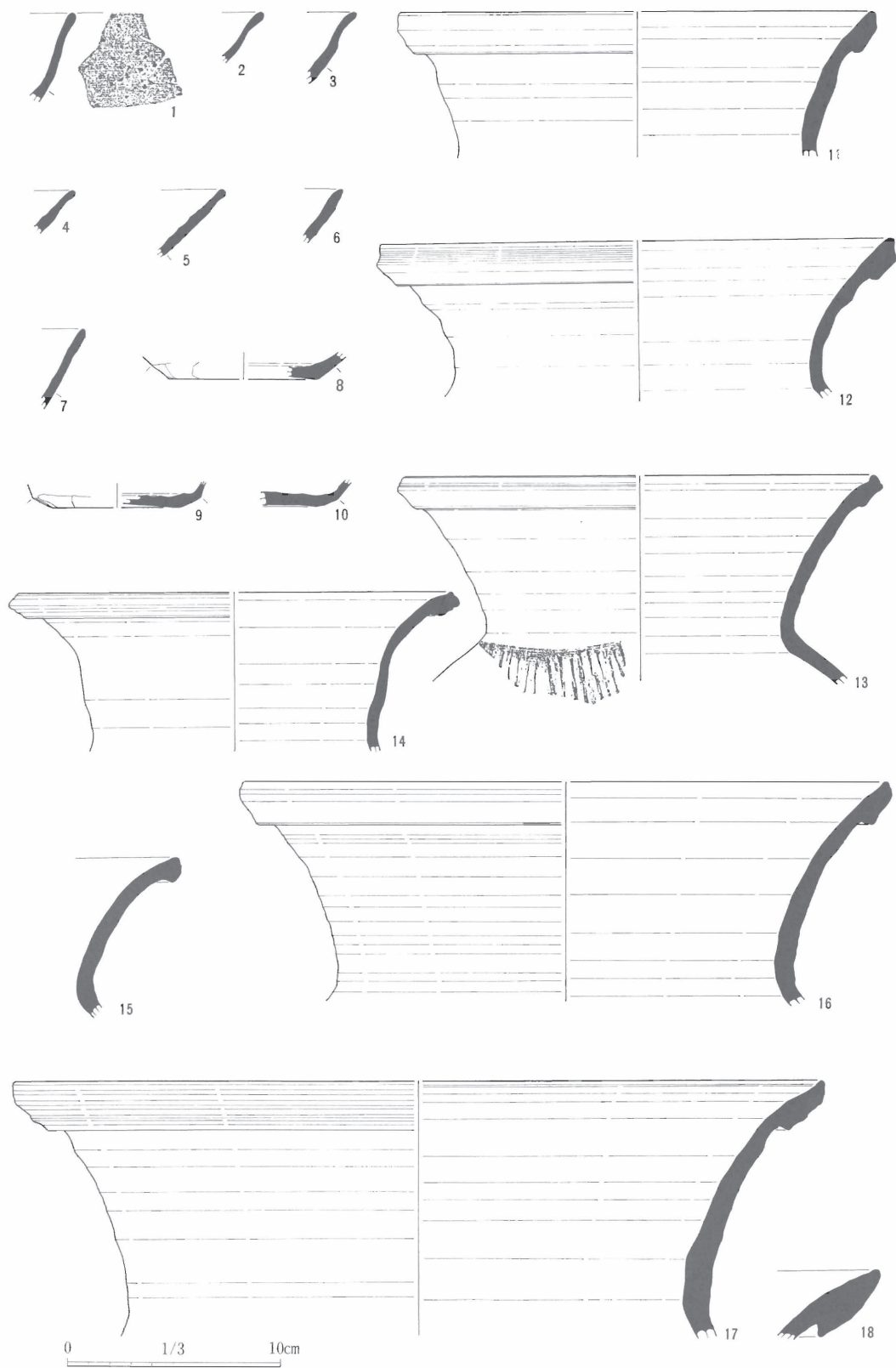
4. 採集遺物

①A地点(第2・3図、第1表)

採取した遺物は布目瓦片1点のほかはすべて須恵器片であり、甕・甔の小破片がほとんどを占めている。第2図1～10は坏で、採集したものすべてを図示したが、口径を復元できるものはない。体部下端から底部の遺存するものはすべて手持ちヘラケズリが施される坏IIである(註2)。1～7は口縁部～体部破片であるが、口縁部が肥厚しながら外反するもの(1～3)、同じく肥厚するが、直線的なもの(4・5)、口縁部をつまみ上げ、小さく外反するもの(6)、口縁部から体部までほぼ同じ器厚で、口縁端部を尖り気味に丸くおさめるもの(7)がある。1は体部内面に「×」?の線刻がなされている。8～10は体部下端から底部破片である。8は底部から外斜し、直線的に立ち上がる。9・10は体部下端の横方向の手持ちヘラケズリによって稜が作出されている。第2図11～18は



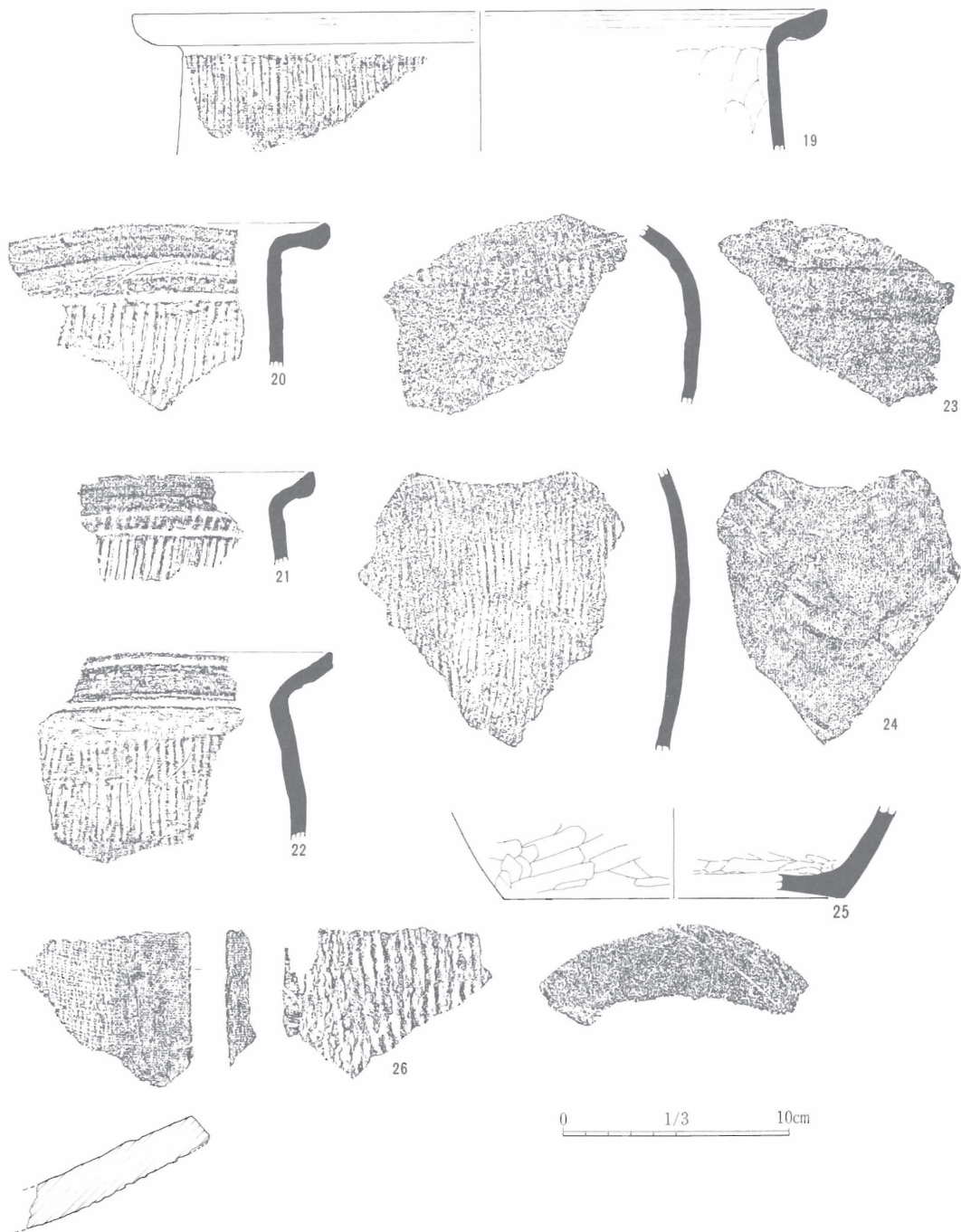
写真1 遺物分布地点遠景(北西から)



第2图 A地点采集遺物(1)

甕Aの口縁部破片である。11~13は口径20.5~24.1 cmを測り、前回の確認調査でも同法量のものが最も多く出土している。12は下端部の外方に開く部分にヨコナデによって擦り消されているが、縦方向の平行タタキ目の痕跡が観察される。13は胴部

に平行タタキ目が施されている。13・14は口縁端部を上方につまみ上げている。15は11~14と同法量になると思われるが口縁帯がほかと異なり小さく、断面形が折り返し状ではなく、端面がほぼ垂直で上方につまみ上げず、鍵の手状を呈する。16

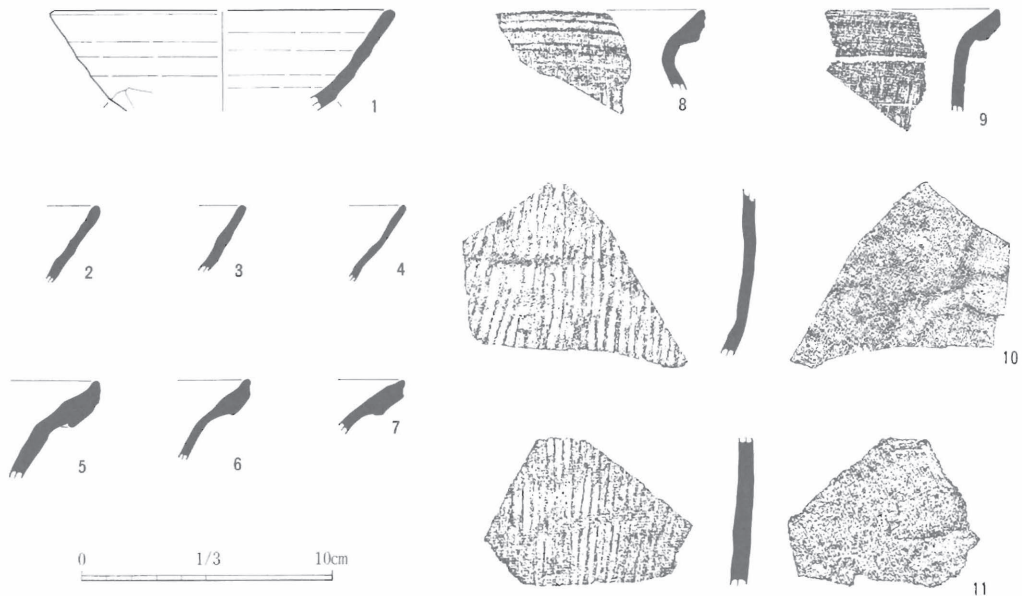


第3図 A地点採集遺物(2)

は口径30.5cm、17は口径38cmを測る。18は長さ4.3cmを測る大形の口縁帯部分の破片で、かなり大形の甕になると思われ、甕Cの可能性もある。第3図19~22は甕Bの口縁部~胴部破片である。甕の可能性もあるが、胴部の傾きが外方に開いているので4点とも甕と判断した。口径を復元できたのは19のみで、30.5cmを測る。口縁部はいずれも折り返しによる口縁帯を有するもので、胴部外面には縦方向の平行タタキ目、内面には外面タタキの際の当て具痕がみられる。外面口縁帯直下はヨコナデが施されているが、タタキ目の痕跡が認められ、とくに21は明瞭に観察される。このことから、口縁帯はタタキが施された後に成形されていることがわかる。22は口縁部~胴部への屈曲度が19~21より弱く、口縁帯の厚さが薄く形状も異なるもので、上端部はつまみ上げられ、下位には沈線が施されている。第3図23・24は甕の胴部破片である。ほかにも多く採集したが、遺存度の大きいもの2点を図示した。23は甕Aの肩部付近と考えられるもので、外面平行タタキ目が施された後、横方向のナデが部分的に施され、中央の湾曲部付近には3条の横方向の線が認められる。内面にも横方向のナデが施されている。24は外面に縦方向のタタキ目、内面には当て具痕が認められる。第3図25は甕の胴部下端~底部破片で、底径15cmを測る。

胴部下端外面は横方向の手持ちヘラケズリ、底部はやや判然としないが、ナデが施されていると思われ、その上にスジ状の圧痕が認められる。内面はナデで調整されている。以上のA地点採集の須恵器について胎土・焼成・色調についてみると、灰色で硬質に焼き上がっているのは全体の約2割ほどであり、表面は灰色~黒色・暗褐色、断面は明褐色を呈するものが多い。坯は明褐色を呈し、軟質なものが多い。胎土中には鉄分と思われる1~1.5mmの黒色粒子、赤色粒子が含まれているものが多く、ほかに白色粒子、石英粒子も多量に含まれている。また、わずかであるが白色針状物質を含むものも見受けられる。

第3図26は今回採集した唯一の須恵器以外の遺物で、平瓦の破片である。厚さは最大1.8cmを測る。凸面は縄タタキが施されており、縄の太さは約3~5mm、5cmあたりの縄の本数は9本を数える。凸面の側面側縁付近には縄タタキの下に布目が認められる。凹面の布目はやや粗く、3cmあたりの縦糸の本数は16本、横糸の本数は18本を数える。また、側面および凹面の側面側縁は縦方向のナデが施されている。かなり扁平であり、凸面に布目が観察されることから、一枚作りの可能性が高い。色調は暗茶褐色を呈し、焼成は不良で軟質。胎土中には長石粒子、石英粒子を少量、雲母粒子、白



第4図 B地点採集遺物

第1表 A地点採集須恵器観察表

番号	器種	法量(cm)		胎土	焼成	色調		備考
		口径	底径					
1	坏 II	—	—	石英粒子、赤色粒子、白色針状物質	普通	内外面 断面	灰色 明褐色	内面線刻「X」?
2	坏	—	—	白色粒子	良好	内外面 断面	青灰色 白灰色	
3	坏 II	—	—	雲母粒子、赤色粒子、白色粒子	不良	内外面 断面	明褐色 暗褐色	
4	坏	—	—	雲母粒子、赤色粒子	不良		明褐色	
5	坏 II	—	—	雲母粒子、赤色粒子	不良		明褐色	
6	坏	—	—	白色粒子	不良		茶褐色	
7	坏 II	—	—	雲母粒子、黒色粒子	普通	内外面 断面	暗灰色 明褐色	
8	坏 II	—	7.0	石英粒子、白色粒子	不良	内外面 断面	黒色 明褐色	
9	坏 II	—	6.0	石英粒子、赤色粒子	普通		茶褐色	
10	坏 II	—	—		普通		灰色～茶褐色	
11	甕 A	22.0	—	赤色粒子、白色粒子	不良		茶褐色	
12	甕 A	24.1	—	白色粒子	不良	内外面 断面	黒色 明褐色	
13	甕 A	22.0	—	赤色粒子、白色粒子	不良	内外面 断面	暗茶褐色 明褐色	
14	甕 A	20.5	—	石英粒子、赤色粒子	不良	内外面 断面	黒色 明褐色	
15	甕 A	—	—	石英粒子、白色粒子	不良	内外面 断面	暗茶褐色 明褐色	
16	甕 A	30.5	—	石英粒子、黒色粒子	普通	内外面 断面	灰褐色 明褐色	
17	甕 A	38.0	—	赤色粒子、白色粒子	良好		暗褐色	
18	甕 A	—	—	石英粒子、赤色粒子	普通	内外面 断面	暗茶褐色 明褐色	甕Cの可能性あり
19	甕 B	30.5	—	石英粒子、赤色粒子	不良	内外面 断面	暗茶褐色 明褐色	
20	甕 B	—	—	石英粒子	普通		茶褐色	
21	甕 B	—	—		良好	内外面 断面	青灰色 白灰色	
22	甕 B	—	—		普通	内外面 断面	灰褐色 明褐色	
23	甕 A	—	—	白色粒子、白色針状物質	良好	外面・断面 内面	茶褐色 青灰色	
24	甕	—	—	赤色粒子、白色粒子、白色針状物質	普通		暗茶褐色	
25	甕	—	15.0	白色粒子	良好	内外面 断面	青灰色 明褐色	

第2表 B地点採集須恵器観察表

番号	器種	法量(cm)		胎土	焼成	色調		備考
		口径	底径					
1	坏 II	13.6	—	雲母粒子、白色粒子	不良	内外面 断面	黒色 暗茶褐色	
2	坏	—	—		良好		濃灰色～茶褐色	
3	坏	—	—		良好		濃灰色	
4	坏	—	—	石英粒子	不良		明褐色	
5	甕 A	—	—	白色粒子	良好		灰色	
6	甕 A	—	—	雲母粒子	普通	内外面 断面	青灰色 明褐色	
7	甕 A	—	—	白色粒子	良好		青灰色～灰褐色	
8	甕 B	—	—	赤色粒子	普通		明茶褐色	
9	甕	—	—	雲母粒子、赤色粒子	不良	内外面 断面	暗茶褐色 明茶褐色	
10	甕	—	—	黒色粒子	良好		暗灰色	
11	甕	—	—	白色粒子	良好		濃灰色	

色針状物質を微量含む。

②B地点（第4図、第2表）

採集した遺物はすべて須恵器片で、甕・甗の小破片がほとんどである。1～4は坏IIである。口径を復元できたのは1のみで、13.5cmを測る。厚手で表面は黒色を呈し、軟質。断面形は直線的に立ち上がり、口縁端部でやや肥厚する。2～3も直線的な断面形を呈するものであるが、2は口縁端部で肥厚、3はやや薄くなる。4はかなり薄手のもので、器厚は2mm前後を測る。5～7は甕Aの口縁部破片で、いずれも小形のものになると思われる。8は甕Bの口縁部破片である。9は甗の口縁部破片で、下方に縦方向と横方向の線が認められるが、これは四角形の把手をヘラ状工具で面取り成形した際についた疵であり、おそらく右下に把手が付されていたと思われる。10・11は甕の胴部破片で、外面は縦方向の平行タタキ目、内面には当て具痕が施されている。10の外面には太さ4mmほどの横方向にナデた線が認められる。B地点採集の須恵器は胎土・焼成・色調についてはA地点とほぼ同じであるが、灰色～灰褐色を呈し、硬質に焼き上がったものが多い。

5. 採集遺物の特徴

今回2か所から採集した須恵器は坏が極めて少なく、甕・甗の破片がほとんどで、これは前回の確認調査と同じ傾向を示している。また、胎土・焼成・色調ともよく似ており、ほとんど区別がつかない。時期決定の決め手となる坏は図示し得たものも器形の全体が窺えるものは皆無であった。調整がわかるものはすべて体部下端～底部にかけて手持ちヘラケズリを施す坏IIであり、法量的にはA地点では第2図8が底径7cm、同9が底径6cmを測り、B地点では第4図1の口径13.6cmが知られるのみである。確認調査で出土した坏IIは形態、法量的に個体差が著しく、口径が12.4～14.6cm、底径が5.1～7.3cmとかなりの幅がある。上記の3個体の法量もこのなかにおさまることから、あまり時期差はなく、おおむね9世紀中頃に位置付けられると思われるが、相互の新旧関係を論ずるには資料的にあまりにも少ない。ほかの器種についても、第2図15、第3図22など一部を除いて確認調査とほぼ同様のものが出土した。今回採集した遺物のなかで最も注目されるものはA地点採集の

平瓦（第3図26）である。瓦は前回の確認調査ではまったく出土しておらず、また、今回採集したのも1点のみであるため、ここで焼成された製品であるか焼台などに用いられたものか即断できないが、本遺跡と支谷を一つ隔てて、70m北西側に位置する中原窯跡からは比較的まとまった量の瓦が出土している（註3）。比較してみると中原窯跡出土の瓦はおおむね硬質に焼き上がっており、A地点採集の平瓦より凸面の縄タタキは細かく、凹面の布目は密である。さらに側面や端面はヘラケズリで調べられるものがほとんどで、A地点採集の平瓦のように凹面の側面側縁を広くナデているものは皆無である（註4）。このことから、A地点採集の平瓦が中原窯跡出土瓦を製作した同一の工人の手によるものである可能性は低いと思われる。なお、前回の確認調査では量的にわずかであるが鉄鉢形鉢、短頸壺、脚部片、円面硯のような寺院、官衙などとの結びつきを示唆するような製品が出土しており、このことを考えあわせるならば、本窯跡で瓦生産が行なわれたとしても決して不自然なことではないと思われる。

6. おわりに

宇津志野窯跡の確認調査が終了してほぼ1年、報告書が刊行されてから7か月がすでに経過したが、宇津志野窯跡の性格や供給範囲の問題点についてはいまだ何ら解決できていないのが現状である。今回の報告が確認調査の欠を少しでも補ない、それらを解明する一助となれば幸いである。

今回報告した遺物分布地点のうちA地点は窯跡である可能性が極めて高いが、ポーリング調査の結果のみで即断するのは危険と考え、あえて〇〇号窯跡とは呼称しなかった。今後は第一に現状での保存を望むが、将来的には、より実態が明らかになることを期待したい。

なお、谷句氏には確認調査中から小稿作成にいたるまで多大なご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

- 註1 渡邊高弘 1992『千葉市宇津志野窯跡確認調査報告書』（財）千葉県文化財センター
- 2 以下、坏、甕の分類は註1に従う。
- 3 関口達彦 1990『千葉市中原窯跡確認調査報告書』（財）千葉県文化財センター
- 4 筆者実見のうえ確認。